

在日ブラジル人と日本人との接触場面 会話におけるコミュニケーション問題

エレン ナカミズ*

キーワード： 在日ブラジル人, 座談会, トピック提供, トピック展開, 調整ストラテジー

要 旨

在日ブラジル人の数が急速なスピードで増えつつある中, 社会におけるさまざまなレベルでブラジル人と日本人が接する機会が多くなってきた. その結果, 異文化接触上の問題が現われたケースは少なくない. このような状況で, 両者は異文化によるコミュニケーション問題を自覚しているかどうか, それらの問題をどのように解決しようとするのかなどが本稿の主題となる.

ここで, 在日ブラジル人労働者と日本人との接触場面で行われた会話を資料に, トピック提供・展開の観点からインフォーマントの参加の度合を調べた. さらに, Neustupný が指摘した調整ストラテジーを応用しながら, ブラジル人話者がディスコースレベルで使用する調整ストラテジーを分析した. 一般的に NS と NNS との会話では NNS がトピックを提供しない傾向をみせるといわれるが, 今回ブラジル人話者は会話中に出されたトピックが自分と関係していたものなので, 積極的に参加することができた. 調整ストラテジーに関しては, インフォーマントと同じ母語を話す者が同じ場にいる時は日本語からポルトガル語への切り替えが多くみられた. つまり, 自分より日本語能力が高い者を媒介に, 日本人に話しかける. 媒介者がいない場合は, パラフレーズの使用が増えた.

こうした在日ブラジル人におけるコミュニケーション問題は在日外国人に関する研究の一部として捉えなければならないであろう.

1. はじめに

1980年代から外国人労働者が, 日本のさまざまな地域で日本人と共存するようになった. その中で, ブラジル人の数が顕著である. 現在, 日本に滞在しているブラジル人は約15万人だといわれているが, 労働者がその大部分を占める. ブラジルの経済が悪化しつつあった一方, 日本の好景気が最高潮に達した結果, 「出稼ぎ現象」が起きた. こうした現象は経済学や社会学など

* Ellen Nakamizu: 大阪大学文学部日文学科(社会言語学講座大学院後期課程3年生).

の分野ではすでに研究が進んでいるが、言語学的な観点からはまだ研究されていないといってもよいであろう。

日本経済が不況に入って以来、来日するブラジル人の減少が予想されたが、実際にはブラジル人コミュニティが何箇所かで形成されつつあり、その人数が安定していることは事実である¹。このような状況で、ブラジル人と日本人が接する機会が増え、異文化接触上の問題が現われたケースも少なくない。両者はこうした異文化によるコミュニケーション問題を自覚しているのか、これらの問題をどのように解決しようとするのかなどが本稿の主題となっている。

日本に滞在しているブラジル人の大部分は日系人であり、外面的には日本人と変わらないということが彼らの日本語能力、あるいは日本語におけるコミュニケーション能力に関して大きな誤解を招く。まだ血縁主義を重視する日本社会は、日系人の扱い方に戸惑い、日系人に同化を求める姿勢を頻繁にみせる。しかし、日系人は日本人との相違点が多く、それらの相違点はさまざまな形で現われるが、もっとも目立つのがことばの使用である。このことは1993年8月から11月にかけて、85名の在日ブラジル人を対象に実施したアンケート調査から明らかになった²。アンケート調査を通じて、主に大阪府と滋賀県に滞在中のブラジル人のプロフィールとコミュニケーションにおける困難さをうかがい知ることができた。アンケート調査の結果から述べると、ほぼ全員のインフォーマントにとって、ポルトガル語が母語であり、さらに、ブラジルで育った環境によって、ブラジルの習慣や価値観を受け入れた程度が異なってくる。このように、日常生活では日本人との交流が薄く、日本の文化的社会的なルールがわからないため、コミュニケーション上の障害が生じやすい。

マクロレベルで在日ブラジル人の言語実態を調べた上で、本稿では、実際のインターアクション場面の会話を分析しながら、ディスコースレベルにおけるコミュニケーション問題とそれを解決するストラテジー(調整ストラテジー)を探っていきたい。次節では「調整ストラテジー」の理論的な枠組みについて考察しよう。

2. コミュニケーション問題に関する研究

コミュニケーション問題に関しては、さまざまな研究がなされている。その中で、Tarone が代表的である。「ノンネイティブスピーカーの言語知識とネイティブスピーカーの言語知識との

¹ 梶田(1994)が日系人に関して指摘しているように「再来日する割合は、全体の約80パーセントにも達するといわれる(中略)東洋大学による大泉町調査では、50パーセントが定住化志向を示し、ブラジルと日本とをいったりきたりする「還流型」ないしは「分居型」移民(喜多川豊子)が多くなると予測されている」, p. 162.

² 調査の具体的な結果についてはエレン・ナカミズ(1994)「関西在住ブラジル人の言語生活——アンケート調査からの一考察」、『ポルトガル語の話しことばの諸相——日本語とポルトガル語との社会言語学的対照研究』中間報告(1)、国立国語研究所を参照。

ギャップを埋めるための手段として『コミュニケーションストラテジー』を使用する」という。Tarone はこの定義をさらに拡大し、「話し手と聞き手は同じような知識を共有していない場合、できる範囲でお互いの知識を合わせる努力をする。その知識は言語的な体系と社会言語学的なルールを含めるものである」と述べている (Tarone 1983)。こうしたコミュニケーションストラテジーは、基本的に Neustupný が定義した「調整計画」(adjustment plan, あるいは corrective adjustment strategy) に当たるものであろう。双方がコミュニケーション問題を解決する手段を指すのである。ただし、Neustupný が指摘した「調整計画」はもっと幅の広い問題を扱う「言語管理過程」の一部にすぎない。なお、1970年代から Neustupný が発展させてきた「言語管理」理論もコミュニケーション問題に関する研究に大きな貢献をもたらした。

「言語行動には少なくとも二つのルールのグループが存在している。一つは言語使用のルールであり、もう一つは言語訂正³のルールである。言語使用のルールによって、言語的なコミュニケーション行為が成り立つ。言語訂正のルールはコミュニケーション問題があった時に用いられる」(Neustupný 1978)。現在用いられている「言語管理」(language management) という用語は、以前名づけられた「言語訂正」(language correction) とほぼ同じ範囲をカバーするといってもよい。話し手と聞き手は自分の行動、およびお互いの行動を管理する能力をもっている。言語管理過程には、逸脱、留意、評価、調整(訂正)、という四つの段階がみられる (Neustupný 1978, 1988)。最初は、コミュニケーションに逸脱 (deviation) があり、その逸脱が会話の参加者に留意 (noted) された場合、無視されるか、評価 (evaluation) される、という二つの選択がある。評価された場合は、プラス評価か、マイナス評価か、どちらかによって調整の段階に入る。話し手あるいは聞き手がマイナス評価をすると、最初に逸脱と呼んだものは「不適切さ」(inadequacy) として認められる。「不適切さ」としてみられても、無視される可能性はあり得る。つまり、話し手も聞き手もその不適切さを調整しないということである。それを調整しようとすれば、いわゆる「調整ストラテジー」(corrective adjustment strategies) を使用することになる。

言語管理、とりわけ調整ストラテジーは「接触場面」(intercultural situation) でよくみられるものである。つまり、ある言語のノンネイティブスピーカー同士、あるいはノンネイティブスピーカーとネイティブスピーカーが参加する会話では話し手と聞き手は、それぞれ、異なる母語、異なる文化的、社会的な背景を持つことを認識した上で、コミュニケーションの成功を目指しながら、調整ストラテジーを使用する頻度が高いと思われる。このように、ここではブラジル人と日本人が参加する会話の具体例を通じて、異文化による特徴とコミュニケーション問題があった時に使用された調整ストラテジーについて考察したいと思う。

以下、主に次の事項の分析を試みたい。会話全体の構造にかかわるトピック展開を考察し、参

³ 現在、「言語管理」という用語が用いられるようになった (Neustupný 1988)。

加者の協力の度合や会話の流れを明らかにした上で、参加者の個々の発話における調整ストラテジーをとりあげる。特に次の点を重視する。

- (1) 接触場を対象とする研究は、多くの場合、ネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカーが会話をする場面では、ネイティブスピーカーである側が会話をリードし、会話を展開させる責任を担うという。ここで主張したいのは場面における特定の要因によって、ノンネイティブスピーカーは、言語能力が不十分であっても、完全に「受身」にならず、積極的に会話に参加することができるということである。次節に提示するデータをみた限りでは、まだ表現力が足りないノンネイティブスピーカーの一人が新しいトピックを提供するし、出されたトピックを展開させることもみられた。これは、会話が行われた場に出たトピックの種類、またそれらのトピックの出し方と厳密な関係があるものと思われる。
- (2) 日本語を正式に学習していないノンネイティブスピーカーは、言語能力が不十分であるにもかかわらず、コミュニケーションを成功させるためのさまざまな調整ストラテジーな使用することができる。
- (3) 今回分析した会話では、ブラジル人のインフォーマントと同じ母語を持つ者(調査者)が参加したため、その者が自動的に媒介者の役割を果たすことになった。媒介者がいるかないかによって、ブラジル人のインフォーマントが使用するストラテジーが異なっていくことが明らかになった。

データの具体的な分析に入る前に、調査法とインフォーマントの属性とネットワークについて詳しく述べよう。

3. 調査の概要

3-1. ブラジル人インフォーマントの背景

本稿の分析対象は、あるブラジル人の家庭で録音した会話である。ブラジル人のインフォーマントは滋賀県内在住の4人家族(A家)である。筆者は滋賀県で参与観察調査を行った際、A家と知り合い、それ以来連絡を保っている。

A家は、二世の夫婦と三世の娘2人がいる。家族全員の年齢と在日期間は表1が示しているとおおりである。

二世の夫婦は、日系人が多いブラジルの南部にあるパラナ州出身で、幼い頃、日系人コミュニティに住み、家庭内で日本語を話していた。さらに、日語学校(民族学校)で正式に日本語を習ったことがある。話しことばには不自由を感じないようで、また読み書きもある程度までできる。一方、2人の娘は、ブラジルで住んでいた、中央部にあるマツ・グロソ・ド・スル州ではほ

表 1

	年 齢	在日期間
父	50代	2年間
母	40代	2年間
姉	21歳	2年間
妹	17歳	1年7ヵ月間

とんど日系人と接触せずに、生活していたという。それに、両親とはポルトガル語のみを使っており、正式に日本語を学習していない。来日してから、休日を利用して、独学で日本語を勉強しているが、日本語能力はまだ不十分である。

本稿では、2人の娘(姉:B1,妹:B2)と日本人インフォーマントとの会話を分析の対象とする。

3-2. インフォーマントのネットワークと日常生活

A 家が最初に住んでいた甲西という町が滋賀県甲賀郡にある。甲西町には工業団地が集中しており、人手不足のため、1990年代に入ってから、ブラジル人とペルー人の労働者が急増してきた。人口は約5000名であるが、その中で、ブラジル人が450~500名いる。1993年8月に行った1週間の住み込み調査(参与観察調査)で、筆者が観察した限り、甲西町では、関東のいわゆる「企業城下町」(群馬県の太田市、静岡県浜松市など)⁴ でみられるほど、ブラジル人コミュニティとブラジル人ネットワークの形成がまだ進んでいないようである。たとえば、ブラジル人が多い他の地域と比べ、ブラジルの食品店は非常に少なく、ブラジル料理店やブラジル人が集まる場所はまだみられない。今の状況からいうと、滋賀県のブラジル人コミュニティはまだ形成中であり、今後、定着することが予想される。

会話が録音された2週間前、父母が転職したため、家族全員が同じ滋賀県にある日野町に引っ越した。姉妹は、甲西町のある工場の社員であるので、現在日野町から甲西町まで通勤している。彼女らが勤務する工場では、他にブラジル人が5名いる。普段ポルトガル語を使うことは多いが、少しの間、日本人の同僚とも同じ現場で働いたことがあり、それらの同僚と時々日本語で雑談していたとのこと。しかし、同じ工場にいる日本人の社員との交流が深いとはいえないであろう。さらに、会社の同僚以外に、家を訪ね合う程度の日本人との個人的な付き合いもある。

日本人との付き合いに関しては、A家の姉妹が積極的である。日本語と日本文化に関心を示している。観察したところ、A家のネットワークの拡大には2名の娘が大きな役割を果たしていると思われる。

⁴ 「企業城下町」に関しては、梶田(1994), pp. 149-150を参考にした。

3-3. 日本人インフォーマントの背景

会話に参加した2名の日本人は筆者の知り合いであり、A家とは初対面であった。1名(J1)は21歳の男子大学生で、ポルトガル語がわからないが、ブラジルに観光旅行で行ったことがあり、ブラジル人と初めて接したわけではない。もう1名(J2)は40代の男性であり、ポルトガル語がわかる他、ブラジル文化にも馴染んでいる。

3-4. 会話録音のしかた

録音した場所はA家宅であった。会話を録音することはあらかじめ全員のインフォーマントに伝えてあったので、抵抗感はなかったようである。

インフォーマントがお互いの存在に慣れた段階で録音機を取りだしたので、挨拶や紹介のきまり文句などのような、最初のやりとりは録音されていない。録音の時間は55分間であった。

最初は、全員が一緒に話していたが、段々と二つのグループに分れ、J1がB1とB2を中心に会話を進め(グループI)、J2は両親と別のグループを形成した。調査者のEは部分的にグループIに参加した。

本稿では、J1、B1、B2が中心になった会話だけに焦点を当て、その会話にみられた特徴や参加者、とくにブラジル人インフォーマントが使用した調整ストラテジーについて観察したい。

4. データの分析と解釈

4-1. トピック提供・展開

会話の種類が、その会話の進み方や話者の態度と参加のしかたなどに大きな影響を与えることはいままでもない。ここで分析するインフォーマルな「座談会」のような場面では話者が会話を進行させるために互いに協力し合って、一つ的话题を話し尽くせば、新たな話題を導くという行動が普通であろう。しかし、接触場面における座談会ではこのような規則がみられるのだろうか。

Fan (1992) は、中国人と日本人が参加する接触場面を研究し、ネイティブスピーカー(NS)とノンネイティブスピーカー(NNS)のあいだに亭主役・客(host/guest)関係が成り立つと述べている。「接触場面では、ネイティブスピーカーである側が中心になりがちで、会話を『司会』する責任を引き受ける」。また、Marriott (1984) は、オーストラリアに滞在中の日本人主婦が英語で会話をする場面を分析して、言語能力が不十分なNNSは新しいトピックを導入し、もしくは導入されたトピックを維持することはできないであろうとしている。

上述のような特徴は、NSとNNSとの会話でよくみられるであろうが、接触場面における特

定の要因によって、言語能力が不十分な NNS は積極的にトピックを提供し、発展させることも可能であると主張したい。ここで、Hymes が指摘した「コミュニケーションの要素」(components of communication) という社会言語学的な概念の中に “setting” と “topic” を応用してみると、対象の会話で設定した「場所」と「会話のトピック」、それぞれがこれらの要素にあてはまると思われる。

この会話は、A 家の自宅 (setting) で行われたため、A 家を初めて訪問した日本人話者が遠慮していたであろう。一方、ブラジル人インフォーマントがもてなしをする責任を感じたことも予想される。さらに、会話全体が一つのトピック (topic) に基づいている。B1 は、調査者 E の提案を受け入れ、自分の写真アルバムを J1 にみせながら、会話を進めたわけである。E は、すでに B1 の趣味が写真であることを知っていたし、アルバムをみたことがあったので、会話の途中で写真の話題を導入した。こうして、写真の話題をもちだしたのは決して不自然な行動ではなかった。

写真アルバムは B1 が所有しているもので、J1 にとっては未知のものであった。これが B1 が積極的に会話に参加した理由の一つであると考えられる。このように、B1 が導入した数多くのトピックは手元にあった写真の説明に当たる。

(1) J1: すごい。皆、写真取る時、面白い。いつもこういう感じ。

T1→B1: そう(ポーズ)。それは、友達ね、学校の時。

J1: アア。

T2, T3→B1: これは、カンポグランデね、私の住んでた町。T2←/→T3これは、ちょっと派手けどもね、女の子ばかり、女の子ばかりね。

J1: ちょっと派手な写真で

B1: でも、ブラジル人そう。やっぱりね、皆

J1: (笑)

T4→B1: アア、これはね、大学、ブラジルで大学に入るため、あの時、髪の毛は、全部、知ってますか。で、友達入った時の、私だけ入らなかったけど。

(上の T は「トピック」という意味である)

会話の流れが「写真」のトピックから離れた場合は、B1 が控え目になり、新しいトピックを導入する役割は J1 に移るといった傾向がみられた。

(2) J1: でも、一番最初ね。友達になった、外国人の友達が、あの、ブラジル人の M と C、それから、ずっと、ブラジルのイメージがリオ・デ・ジャネイロとサンパウロとカーニバル、サンバと、(E: ウン) いろんなことを教えてもらったから、すごい面白かった。食べ物がやっぱりおいしいね。

E: [ウン]。

B1: そうですか.

J1: 日本の食べ物はおいしいですか.

B1: ああ、おいしいです. 全部食べますよ. (笑)納豆でもね、前は食べられなかったけど.

だが、会話全体の流れをみると、B1 が積極的な態度を示した。J1 の質問に応じて、長い答えを出し、その答えの中に新情報をくわえるケースが少なくない。つまり、J1 が提供したトピックを展開することもみられた。

(3) J1: (ブラジルのコーヒーについて)コーヒーもおいしいでしょう.

B1: でも、コーヒーは日本の方が (J1: いい?) いいと思いました. でも、むこうで、あの、つめたいコーヒーは飲まない. (J1: アア) 皆日本に来て、飲んで、アア、びっくり. あの、いつもあたたかいね、あたたかいの⁵コーヒー.

J1: そう. あの、パリッ(ブラジル航空)にのって、アイスコーヒー下さいというから.....

B1: アア、ありませんね.

ここで、B1 と対比しながら、B2 の行動を観察してみよう.

(4) B1: (B2 について)もう、この子、漢字の方が知ってるね、私より.

J1: アア.....(B2 に向かって)漢字、楽しい?

B2: ウン、そう. フ

J1: 〃でしょう?

例 (4) の隣接ペア (adjacency pair) をみると、B2 は J1 の質問に応じて、単に「Y—N question」式で答えた。J1 はこのように会話の中で何度も B2 の参加を求めたが、成功しなかったといえるであろう。

B2 は、積極的な発言をした場合もあったが、その時はポルトガル語を使用した。例 (5) をみると、B2 は B1 を通じて、J1 に話しかけているように思われる。

(5) J1: ロシアの文字ね.

B1: ロシアは本当に全然わからない.

B2: Pede pra ele escrever alguma coisa. (なにか書いて下さいって、頼んで)

J1: 簡単. ローマ字みたい.

B2 の日本滞在期間は、B1 とほとんど変わらないし、生活している環境も B1 と同じである。しかも、B1 と同じ方法で日本語を習得してきたという。そうすると、なぜ B2 と B1 のコミュニケーション行動の間に大きなギャップが生じてしまうのだろうか。B1 における会話の参加のし

⁵ ブラジル人話者による誤用は訂正されていない。

かたを観察すると、会話の軸になった写真アルバムが大きな影響を与えたと考えられる。また、「写真」から発生した新しいトピックやサブトピックが大体の場合、ブラジルの習慣や文化などと関係深いものなので、B1 にとっては話しやすいであろう。しかし、B2 の行動からいうと、NNS による参加のしかたと度合いには「トピック」以外の要因も働いていると思われる。今回だけでは、それらの要因を明らかにすることができなかったが、それを今後の課題としたい。

4-2. 接触場面におけるトピック

前節の例 (2) と例 (3) でみたように、提供された多くのトピックはブラジルと関係しているものである。B1 の写真を中心としたトピックを除いて、大体の場合、それらのトピックを提供したのは日本人話者 J1 であった。提供のしかたに関しては、質問文の形式がそのパターンであるといえる。つまり、日本人話者がブラジルについて質問することによって、トピックを導入するわけである。

(6) E: アア、皆、同じアパート〔に住ん〕でいる。

B1: 〔はい。〕

J1: えとね、ブラジルで住んでたところは、寒くないところ?

B1: Ahn,⁶ 寒くないです。でも、あの、さむ、冬の時ね、一番寒い時に、あの9度。

上のような特徴は、日本語における接触場面の会話ではよくみられる。会話の参加者は、異なる社会的文化的な背景をもつため、共通の話題をみつけにくい。しかし、お互いの関係を保つために、会話を促進しなければならない。このような状況で日本人話者が相手の祖国について質問したり、日本とその国との違いについて話すことは一般常識であろう。日本人同士での会話ではこうした特徴は出てこないはずである。ここで、ブラジル人話者はこのようなトピックの出し方、またはこの会話の進み方に対して抵抗感があるかどうかを調べるべき点である。データをみた限り、ブラジル人話者は日本人話者の質問に応じて、積極的に祖国について話し、抵抗がなかったようであるが、会話が終わった後、すぐにはフォローアップインタビューを行わなかったため、今後この点を確認する必要がある。

4-3. ブラジル人話者における調整ストラテジー

ここでは、ブラジル人話者がディスコースレベルで使用した調整ストラテジーのいくつかをみていきたい。とくに、B1 と同じ母語を話す調査者の E がいる場合といない場合で使い分けられているストラテジーに焦点を当てることとする。

⁶ これはポルトガル語の否定の間投詞であると思われる。

ポルトガル語を母語とする E が会話に参加するかしらないかによって、B1 が使用する調整ストラテジーが異なってくる。このように、E は B1 と J1 の間に媒介の役割を果たすことになる。

4-3-1. 媒介者がいる場面におけるストラテジー

E がいる場合は、日本語からポルトガル語へのコードの切り替え (code-switching, CS) は B1 の発言に多くみられた。こうした CS は、語彙や表現が足りない時に援助を求めるストラテジーとして使われたものと思われる。

(7) B1: そうですね。これは何でも(聴取不能)、この辞書。

J1: 知らない。

B1: (J1 に向かって)これはね、初め、(E に向かって) é bom pra estudar, é ótimo, e tem gramática no fim, né, tem verbo. Tem tan, que nem pra ele que tava (聴取不能) acho que é bom. (勉強するためにはいいと思う、とてもいい。後ろに文法解説、動詞活用もあるし……彼にはいいと思う。)

E: 勧めてるって (J1: アア)この本がいいって。

B1: 辞書けどもね。

例 (7) では、B1 が自動的に日本語からポルトガル語へ切り替える。E に向かって、話しているようにみえるが、E はすでにその情報を知っているのだから、実際には、E を媒介に、その情報を J1 に伝えようとしているのであろう。

ちなみに、ブラジル人労働者と日本人の間に媒介の役割を果たす者は、ディスコースレベルだけでなく、日常生活でもみられる。参与観察調査の際、確認したように、日本語に不自由を感じる人は自分より日本語能力が高いブラジル人に頼り、必要な時に日本人とコミュニケーションを行っている。それゆえ、数多くの場合、ブラジル人と日本人とのコミュニケーションは間接的に行われている⁷。

4-3-2. 媒介者がいない場面におけるストラテジー

会話の途中で調査者の E が、B1 と J1 のグループから離れ、B1 と J1 が話しつづけた。媒介者がいなくなったような状況で、B1 はコミュニケーションに困難を感じた時、「言い換え」(paraphrase) を使用することがみられた。

(8) J1: この、この絵は?

B1: アア、これはね、あの、なんというんですか。部屋に、家の、この部屋の

⁷ これについては、河野彰 (1994) 『『出稼ぎ現象』の社会言語学的諸相——日本語・ポルトガル語の言語接触研究のために』、『ポルトガル語の話しことばの諸相——日本語とポルトガル語との社会言語学的対照研究』中間報告 (1)、国立国語研究所がすでに指摘している。ナカミズ (1994) も参照。

B2: O que que você queria falar? (何を言おうとしている?)

B1: Quadro. (絵)この絵.

J1: 壁?

B1: 壁, 壁に

J1: 飾る?

B1: はい, かざ, はい, そうです. 飾る.

B1 に尋ねたところ, B1 が「刺繍」という単語がわからなかったため, パラフレーズで説明しようとする. しかし, 会話の流れのコントロールを失い, 会話は B1 が望まない方向にいつてしまう. 結局, B1 は自分の意志を伝えることができぬ, あきらめる道を選ぶ. あきらめる態度は「回避」(avoidance) のストラテジーとしてとらえることができる. さらに, 「なんといいですか」という援助要求に応じて, J1 が援助を提供した(壁?).

もう一つの例をみてみよう.

(9) B1: ウン, 梅田じゃなくて, 大阪のどこの, ウン, ウン, あの, 例えばね, 難波は, あのエレクトロニック (J1: 笑) 多いですね. (J1: ウン) 服とかは?

J1: ア, 難波もある.

B1: ありますか?

J1: あのね, K さんね, 彼女よく行くから. 女の子の, わからないから, 彼女に聞いたら, わかる.

B1 は, 「大阪ではどこで服の店がたくさんありますか」という情報を知りたがっていたが, その瞬間に直接的な疑問文をつくることができなかった. このように, 例を挙げながら(たとえば, 難波では電機製品の店が多い), 婉曲的な方法で J1 に同じ質問をした. J1 は B1 の意図がわかり, コミュニケーションが成功したといえる.

他には, この会話に現われたストラテジーはまだある. 本稿ではそれらのストラテジーについて詳しく述べるできないが, 参考のため, 表 2 にブラジル人話者が使用したストラテジー

表 2 調整ストラテジーとその出現頻度

	媒介者がいる場合	媒介者がいない場合
言い換え		4
援助要求 (1) (なんといいですかなど)		3
援助要求 (2)	6	
確認要求	1	3
回避		4
言い切り	2	4

援助要求 (2): コードの切り替え (code-switching).

の種類とその出現頻度が示されている⁸。

5. まとめと今後の課題

このケーススタディで次の点が明らかになった。

- (1) NNS の B1 は、言語知識が不十分であっても、トピックを提供し、それらのトピックを展開することによって、協力的な態度をみせた。その理由は会話の大部分が B1 の「写真」を話題の中心としていたことと関係しているであろう。また、日本人がブラジル人との接触場面でよく提供する、ブラジル社会と文化に関するトピックが多かったので、B1 にとっては参加しやすい要因の一つであったろう。一方、B2 の消極的な態度を考えると、NNS の言語行動にトピックよりも他の要因が重要になることもある(言語能力、性格、心理的な要因など)。
- (2) B1 は調整ストラテジーを使うことによって、会話に現われたコミュニケーション問題を解決することができた。言語能力とともにコミュニケーション能力を考慮に入れなければならない。とくに、接触場面では話者のコミュニケーション能力がコミュニケーション作業を成功させるための不可欠な要素である。
- (3) 本稿で分析した対象がインフォーマルな座談会であったことが話者が使用したストラテジー、および話者の協力的な行動と関係していると思われる。異なる性質の場面では異なるコミュニケーション問題と異なるストラテジーが用いられるのかもしれない。他の場面での会話も調べる必要性がある。

以上分析したブラジル人と日本人の会話に現われた特徴や調整ストラテジーは必ずしもブラジル人が参加する場面だけにみられるわけではない。一般的に他の接触場面にも出てくる可能性のある特徴である。したがって、日本人とブラジル人との相互作用に接触場面における普遍的な特徴を見出す価値もあると思われる。これから、在日ブラジル人の研究をもっと幅の広い「在日外国人」に関する研究の範囲で扱うべきであると思う。コミュニケーション問題に関しては、日本で労働力を提供している外国人に共通点が多いと思われるからである。

今後の課題としては、在日ブラジル人のコミュニケーション問題をより明らかにするために、ブラジル人の日常におけるさまざまな場面での日本人とのインターアクションを調べる必要性がある。なお、両者のお互いの意識を、フォローアップインタビューなどの方法で浮き彫りにしたいと思う。

⁸ Tarone (1983) が指摘した、コミュニケーションストラテジーの分類を参考にした。

参 考 文 献

- 尾崎明人 (1981) 「外国人の日本語の実態——上級日本語学習者の伝達能力について」, 『日本語教育』 10月45号, 日本語教育学会.
- 梶田孝道 (1994) 『外国人労働者と日本』, 日本放送出版協会.
- 国立国語研究所 (1994. 3) 『ポルトガル語の話しことばの諸相——日本語とポルトガル語との社会言語学的対照研究』 中間報告.
- ネウストプニー, J. V. (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」, 『日本語教育』 10月45号, 日本語教育学会.
- 森 幸一 (1992) 「ブラジルからの日系人『出稼ぎ』の推移」, 『移住研究』 3月29号, 国際協力事業団 (JICA).
- 渡辺雅子 (1992) 「ブラジルからの出稼ぎ労働者の『日本』との出会い」, 『社会調査実習報告書』, vol. 8, 3月, 明治学院大学社会学部社会学科.
- (1992) 「ブラジルからの日系出稼ぎ労働者の実態と日本社会の対応」, 『学院論叢』 3月89号, 明治学院大学社会学・社会福祉学研究.
- Ervin-Tripp, S. 1973. *Language acquisition and communicative choice*. Stanford: Stanford University Press, pp. 62-77.
- Fan, S. K. 1992. *Language management in contact situations between Japanese and Chinese*. Ph.D. diss. Department of Japanese Studies. Monash University.
- Gumperz, J. J. 1982. *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 59-99.
- Marriott, H. 1984. English discourse of Japanese women in Melbourne. In *Papers of the Japanese Studies Centre*. Melbourne.
- Neustupný, J. V. 1978. *Post-structural approaches to language*. Tokyo: University of Tokyo Press, pp. 243-57.
- . 1985. Problems in Australian-Japanese contact situations. In *Cross-cultural encounters: Communication*, ed. J. Pride. Melbourne: River Seine Publications.
- . 1988. Problems of English contact discourse and language planning. Paper presented at the 1988 Regional Seminar on *Language Planning in a Multilingual Setting: The Role of English*. National University of Singapore, 6-8 September 1988.
- Saville-Troike, M. 1989. *The ethnography of communication: An introduction*. Oxford: Basil Blackwell.
- Tarone, E. 1983. Some thoughts on the notion of 'communication strategy.' In *Strategies in interlanguage communication*, ed. C. Faerch and G. Kasper. New York: Longman, pp. 61-74.